

アルセロール・ミタルはここ数十年で5大陸数十か所の製鉄所、工場、鋼山等を大胆に買収して、世界の鉄鋼生産の10%を占有して業界No2に3倍もの差をつける生産規模になり、一時は日本の製鉄所も狙われ、株価も異常に高騰して国益である製鉄技術を奪われるのではと心配させられました。

そのミタルも、世界同時不況の中で1,000円だった株価も今は凡そ250円まで暴落して、ミタル個人の6兆円と言われた資産も4分の1くらいに大幅に減少していると伝えられます。

当時を思えば三村新日鐵会長の先見性に改めて敬服をいたしております。しかしミタルは「世界の鉄鋼需要は今のような極端な低需要は続かず、後半は必ず上向く」と強い信念を持っております。現にベルギー、アメリカの一部製鉄所は遊休（閉鎖）させて、今需要が多く見込まれるブラジル等には低コストで製鉄所の建設を行うだろうと言われて居ります。

ごく最近の日本鉄鋼連盟の発表を見ますと「懸念された自動車産業界等との価格交渉も需要者側が高付加価値材料の安定供給を重視して販売価格交渉に決着が付き、原料炭、鉄鉱石共に30%余りの値下げ交渉も成立し、原材料コスト軽減によって生産の損益均衡の目安が付き、上期の経常赤字と下期の経常黒字で損益トントンの可能性が生れたので各製鉄所共に従来50%~55%の稼働率を60%~70%へと上方修正する」と発表されました。

不景気とは人の心に起る不安ですから好感材料が出始めれば景気は一気に回復するものと私は思っています。

世界の人口は毎年8千万人から1億人近い増加を続けております。そのほとんどが中国、インド等のアジア地域であります。不景気とは言え、これだけの人口増による新しい需要は間違えなく起こります。

ミタルが言う需要もそれを言っているのかもしれませんが。

今の世界恐慌は100年に一度と言われますが、明治以来近代化を目指した日本経済界の不況、恐慌、幾度も遭遇して参りましたが、日本経済界は全滅したこと一度もありませんでした。焼土化した戦後の荒廃の中からも芽を出し、技を伸ばして以前よりも大きく成長、繁栄してきました。

これらの歴史から教えられることは、100年に一度の不況は100年に一度新しく脱皮する極めて良きチャンスであります。

不況の理由を数えて、政治や社会を嘆くよりもこの絶好のチャンスをどう生かすかを考え、希望を捨てないことであります。

今読んでいる本「遊びの品格」の中に、多逢聖因、地藏本願経の中にある言葉ですが、「良き人と沢山出会えば運も自然にこちらへと向いてくる」と教えています。

私の良き師だった故松田芳雄氏が「小才は運に出会っても気付かず、中才は運に気付いても運を生かさない、大才は袖すり合う運も生かす人だ」と教えてくれました。

商工会議所は人脈を作るに最も適したところです。どうぞご活用下さい。